２０１５年度　大学共同研究　研究成果報告書

所属・職・氏名：文学部・三浦麻子
研究課題：社会心理学的アプローチによる道徳・イデオロギー再考
研究期間：２０１５年４月１日～２０１６年３月３１日

研究成果概要（２，０００字程度）
2015 年度は，共同研究の柱となる 3 つの研究テーマにおいて共通して注目する「道徳の基盤となるもの」について，欧米の研究でよく用いられる Haidt らによる道徳基盤理論(moral foundation theory)に基づいて作成された尺度 Moral Foundation Questionnaire(MFQ)の日本における適用可能性を検討した.

Haidt らによる道徳基盤理論については，以下の論文で詳細なレビューがなされている.

Graham et al (2013). Moral Foundations Theory: The Pragmatic Validity of Moral Pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55-119.

Graham, et al(2011)によって，MFQ が多くの文化圏を対象に検討され，5 因子モデルの妥当性が確認された．しかし，この研究で使用された言語はすべて英語であり，参加者はインターネットを通して回答している．したがって，別の文化圏の参加者と言っても，英語を理解できる，比較的西洋文化に順応した人たちを対象とした研究であったと批判される可能性も残している. ただし, Graham et al(2011)における 5 つの因子の α 係数は比較的高い値となっている. その後，多くの言語に翻訳された MFQ が，世界各国で利用され，その妥当性が検討されている．まず，2015 年現在，論文や Web サイト等で公表されている，翻訳版 MFQ の妥当性の検討がどこまで進んでいるのかをレビューした.

・イタリア
Bobbio, A., Nencini, A., & Sarrica, M. (2011). Il Moral Foundation Questionnaire: Analisi della　struttura fattoriale della versione italiana. *Giornale di Psicologia*, 5, 7-18.
イタリアでは 5 因子モデル（道徳基盤理論に基づく）とより高次の 2 因子モデル(Individualizing…5 因子モデルで言うところの care/harm と fairness/cheating が関わっている．政治的なリベラルと関連する側面で，個人の権利と繁栄に関わる． と Binding…5 因子モデルで言うところの loyalty/betrayal, authority/subversion, sanctity/degradation が関わっている．役割や義務を通して個人を結びつけることで集団や組織の強度を増していくという点を強調した項目からなっている．保守と関連（Graham et al, 2009）)についてイタリア人 615 名を対象に検討した．探索的因子分析，検証的因子分析を行い，適合度を検討した結果，5 因子モデル，2 因子モデルとも十分な適合度であったが，5 因子モデルの方が理論的背景からより好ましいと結論付けられた.

・韓国

Kim, K. R., Kang, J., & Yun, S. (2012). Moral intuitions and political orientation: Similarities and differences between Korea and the United States. *Psychological Reports*, 111,173-185.

478 名の韓国の大学生が参加．Graham et al(2011)に基づいて，CFA を行い，その結果を示している．CFI = .681, RSMEA = .068 と適合度はかなり低い．他のモデルとの比較は行われていない．α 係数に関しては，Harm = .52, Fairness= .65, Ingroup = .57, Authority = .58, Purity = .58 であり，全体的に低い．Individualizing と定義される，Harm と Fairness に係る項目をまとめた場合，α = .74 となり，その他の 3 因子の項目をまとめた Biding は α = .80 と高くなる．

・スウェーデン

Nilsson, A., & Erlandsson, A. (2015).The Moral Foundations taxonomy: Structural validity and relation to political ideology in Sweden. *Personality and Individual Differences*, 76, 28-32.

スウェーデン語に翻訳された MFQ を用いて，540 名を対象とし，妥当性を検討．高次の 2 因子を設定した階層モデルと，純潔を独立させた 3 因子モデルとの比較を行った．その結果，他のモデルよりも 5 因子モデルの方が適合度はよかったものの，オリジナル版ほど良いものではなかった．

・5 因子モデル…CFI = .679, RMSEA = .072

・階層モデル…CFI = .674, RMSEA = .073

・3 因子モデル…CFI = .674, RMSEA = .073（階層モデルと同じ）

・ドイツ（論文としては公刊されていないが，オンラインで結果が公表されている）

Bowman, N. (2010). German translation of the Moral Foundations Questionnaire –Some preliminary results.
<http://onmediatheory.blogspot.se/2010/07/germantranslation-of-moral-foundations.html>.

328 名が参加．5 因子モデルは適合度が悪くまた，高次の 2 因子が有意な正の相関関係を示すという（リベラルが Individualizing，保守が Binding と関連し，両者の相関はほぼゼロであるという理論的背景と一致しない）結果であった．適合度指標を見ながらモデルを修正したところ，最終的に 4 因子モデルの方がよいという結論に至った（CFI は.90 以下ではあるが，高次の 2 因子間の有意な正の相関関係は消えた（理論と一貫している）．

・ニュージーランド

Davies, C. L., Sibley, C. G., & Liu, J. H. (2014). Confirmatory factor analysis of the Moral Foundations Questionnaire: Independent scale validation in a New Zealand sample. *Social Psychology*, 45, 431-436.

Moral Foundation Theory(MFT; Haidt & Graham, 2007; Haidt & Joseph, 2004)による，5 つのユニバーサルで生得的な道徳基盤が存在するという主張を検討するため，その他の理論に基づく因子構造と比較した（Kohlberg(1969)の 1 因子理論…正義（Justice）が唯一の，成熟した

ユニバーサルな道徳システムであると主張，Much，Mahapatra，& Park(1997)の自立性（autonomy)，コミュニティ（community)，神聖さ（divinity）の 3 因子モデル，階層モデル（スウェーデンで実施されたものと同じ)，2 因子モデル（Individualizing and Binding)．ニュージーランドの国民を対象に実施している．ニュージーランドは英語圏のため，翻訳等は行わずにそのままオリジナルバージョンを使用した．適合度指標については，すべての項目を対象とした分析では，CFI=.829, RSMEA=.059 となり，特に関連のある項目を選定後，改めて分析した場合は，CFI=.953，RSMEA=.053 とやや値が上がった．他のどのモデルよりも 5 因子モデルの適合度が良くはあったが，オリジナルバージョンそのままでは十分に妥当性が高いとは言えない.

次に，日本国内でなされた MFQ の妥当性の検討についてレビューを試みた．オリジナル版が出版されたのが 2011 年ということもあり，まだ刊行済みの論文の形で検討した研究は見当たらないが，欧米のような 5 因子モデルが必ずしも適用されないのではないかと示唆される結果がいくつか紹介されている.

・小杉考司（2013). 現代学生の規範意識と態度(3). 山口大学教育学部研究論叢第 3 部,62,119-123.
Graham et al (2009)の項目(計 22 項目)を邦訳し，日本人大学生を対象にデータを収集した．分析の結果，4～6 因子解が妥当であると判断し，理論的背景から 5 因子モデルを採用．第 1 因子には Harm に関わる項目が含まれてはいるが, Loyalty や Fairness の項目も混在していた．第 2 因子も Fairness・Harm・Purity が混在しており，第 3 因子は Loyalty と Authority が混在．第 4 因子は主に Authority の項目が含まれており，「権威」と命名しても妥当であるとしている．最後に，第 5 因子は，主に Loyalty とされる項目が含まれており，「忠誠」と命名してもよいだろうと結論付けている．ただしこれは，MFQ のオリジナルバージョンの検討ではない.

・坂本・野波・大友・田代（2014）．政策決定の権利証人過程における道徳判断の影響-WWG II での正統性判断と道徳基盤との関連－　日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集, 362.

公共政策をめぐる権利の正当性判断と道徳基盤との関連を検討している．実験参加者 49 名を対象に道徳基盤尺度（Haidt, 2012）への回答を求め，α 係数を算出しているが，全体的にあまり高くない．また因子構造に関する検討は行われていない.

以上，日本国内における MFQ の研究動向をまとめると，30 項目版の尺度について，その構造の妥当性を体系的に検討した研究はいまだない. 国外で実施されているような, 5 因子モデル, 階層モデル，3 因子モデル，2 因子モデルなどを比較する研究がまずは必要だと思われる.

本報告書は，データで gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください.